

佐藤武敏先生と殷周史研究会

末次信行

令和元年（二〇一九年）八月三十一日、佐藤先生が道山に帰せられた。九十八歳であった。生涯現役の学者・研究者として、ほぼ百年のご生涯を全うされたということになる。私にとって、父母の死を悲しむ感情でもなく、知人・友人の死を悼む心情でもない、これらの気持ちとはいささか異なる感慨の深いものを抱いている。

私は昭和四十五年（一九七〇年）ころから警咳に接しているので、五十年近くお世話になり、ご薫陶を忝うしたことになる。初めてお目にかかったときから、どこか超俗的な雰囲気をおもちであった。佐藤先生に先立つ二月に逝去された直木孝次郎先生たちも同様に感じてもらえたらしく、ある席で佐藤先生のことを「天皇さん」と同僚間で呼んでいた旨の発言があった。佐藤先生が大阪市立大学に着任されたころ、昭和二十六・七年（一九五一・二年）のことらしい。

＊

先生は大正九年（一九二〇年）のお生まれである。いわゆる「戦中派」とされる世代にあたる。かつて、先生の同僚であられた中埜肇博士（一九二二～一九九七年）によれば、一九二〇年に始まる一・二年を「純粹戦中派」として、つぎのように定義付け、この世代の心情を

吐露されている。

「ものごころのつく頃には既に奔騰するミリタリズムの真只中に置かれたため、人格形成期において戦争を、いわばアプリアリオリな与件として、あるいは不可避の運命として、ほとんど無抵抗に受容し、成年に達するや否や、もとよりそれぞれが肯定や否定のさまざまな想いを抱き、また積極的と消極的の違いはあっても、ひとしく国運の命ずるままに戦陣に赴いた世代」を「純粹戦中派」とし、さらに「死地に赴いて遂に還らなかつた人びとへの悼みを常に心のどこかに蔵しつつ、戦中の経験に対する憤激と郷愁、疾しさと懐しさの入りまじったアンビヴァレントな気持を棺桶のなかまで曳きずってゆこうとしている」と述べる（『歴史と文明の論理』中公叢書、一九九四年）。

先生は戦地に赴かれなかつたので、「純粹」の一語は当たらないかもしれない。しかし、「ものごころのつく頃」から青春時代にかけて、こうした最も生き難い、息苦しい時代を潜ってこられたにちがいない。こうした苦難の時代に横浜高等商業学校に進学し、昭和十六年（一九四二年）に卒業されている。商業学校では、経営学や経済学を学ばれているところから、財界に身を置かれるおつもりであったらし

い。ところが、卒業と同時に四月から東北帝国大学の法文学部に入學され、東洋史学を学ばれることになる。この東洋史研究者への方向転換については、直接伺ったこともないし、お伺いする勇氣も持ち合わせなかった。ところが、『貝塚茂樹著作集』第三巻の付録八（一九七七年）に、この間の心情を推測できる箇所がある。いわゆる月報であるが、「貝塚博士の初期の研究」とのテーマで、つぎのようにみえる。

「小川（環樹）博士は若いときからいかに中国文学研究者らしい感じのする方であったので、令兄（貝塚茂樹）も早くから中国古代史の研究に志され、その後、順調な研究生生活をおくられた恵まれた学者であるという感じをいただいていた。ところが著作集により若い頃、はげしい精神のゆれ動きがあったことを知り、私は親しみを覚えた」とある。

佐藤先生が述べられている、この「はげしい精神のゆれ動き」とは、貝塚博士の場合は、「父（小川琢治）の厳命」によって「好きだった西洋学」から「嫌でたまらなかった漢学」への方向転換である。この貝塚博士の「はげしい精神のゆれの動き」に「親しみを覚え」られた佐藤先生にとってのそれは、おそらくは、「経営学や経済学を学び、こうした実学を活かし社会で活躍する方向」から「東洋史学を学び、研究者として事実をおさえ、真実を極めようとする立場」への方向転換であったのではないかと推測される。

月報には、さらに続けて貝塚博士の「内藤史学の本質」にみえる一文、「哲学青年で、歴史とはなにか、どうして歴史を研究すべきか、歴史学方法論について悩みに悩んでいた」とある箇所を引用されてお

り、この「哲学青年としての貝塚博士」にも共感されているらしい。佐藤先生の史学の原点は、貝塚博士と同様、「哲学青年」であり、耐え難い現実、あるいは現代から溯って時代の諸相を見つめ、歴史的に事実を究明しようとされたように思われる。

*

佐藤先生のご業績は多数にのぼり、また研究領域も多岐にわたる。ご業績の著作・論文目録や概要については、水利史研究会『水利史研究』第四七号（二〇二〇年三月）にみえ、さらに同四八号ならびに大阪市立大学大学院文学研究科東洋史研究室『東洋史論叢』に追悼号が予定されている。また、個人的に格別な御配慮を賜ったことについては、すでに小文を草することがあった（『ブンジン』としての篆刻修行『藤枝晃』自然文化研究会、二〇〇〇年）。

そこで、ここでは先生と殷周史研究会（漢字学研究会）との関わりを中心に述べたい。

佐藤先生の最初の学術論文は、「令彝考」（『支那学』十二巻五号、一九四七年）である。これは周初の東南方経営に関する論文で、貝塚説（殷末周初の東方経略に就いて）に対する異論であり、岡崎文夫説に沿うかたちで提出された。佐藤先生の研究者としての出発点は、令彝の銘文研究すなわち金文研究ということになる。出土資料の研究を徹底しようとされたのであろう、昭和二十五年（一九五〇年）には東京大学大学院に入学され、考古学を専攻されている。そして昭和二十六年（一九五一年）には「殷の裝飾芸術に関する若干問題」（『文化』十五巻四号）という論文を発表されている。ここでは殷の芸術・

文化の性格を究明する場合、これまで問題とされてきた象徴的な動物文様だけでなく、新たに写実的な動物文様を加えて検討対象とすべきことを提言されている。さらに、甲骨文字を扱われ、「殷代の農業経営に関する一問題」(『中国古代史の諸問題』東京大学出版会、一九五四年)を提出され、甲骨文字「衆」の性格について論じられている。

こうした論文以外に、考古学系学界の動向について、つぎのように続々と発表されている。

〔書評〕董作賓『小屯・殷虚文字甲編自序』(『史学雑誌』六十卷六号、一九五一年)

〔胡厚宣氏の近業など〕(『甲骨学』一号、一九五一年)

〔河南省渾池県諸遺蹟の調査(中国古代学界の近況1)〕(『古代学』

一卷一号、一九五二年)

〔書評〕董作賓『中国古代文化的認識』(『古代学』一卷二号、一九五二年)

〔甘肃古代文化研究の二三の問題(中国古代学界の近況2)〕(『古代学』一卷四号、一九五二年)

〔董作賓氏の甲骨文研究の一方〕(『甲骨学』二号、一九五二年)

〔殷代青銅器研究の最近の動向(中国古代学界の近況3)〕(『古代学』二卷一号、一九五三年)

〔甲骨文研究の進展〕(『史学雑誌』六十三卷八号、一九五四年)

などなどである。この時期、先生にとってのいわば「考古学」時代であり、新出土の考古学的遺物や遺跡の情報を収集され、発信に熱中さ

れている。

このように、青銅器を史料として、周初の政治史もしくは殷文化研究に時間を費やされ、あるいは、考古学に没頭される時期がおりであったが、先生本来の研究テーマは「中国古代経済史研究」であるといえる。

東北大学大学院のころから、すでに「中国古代都市研究」というテーマで論文をまとめられている。これは未発表ということであるが、やがて水利史研究、古代手工業研究として発展させ、研究が深められることになる。

＊

先生の歴史研究のスタンスは通史派であった。史料の許す限り時代を溯らせ、全体把握を試みられておられるように見うけられた。こうした観点から、殷周史研究会を立ちあげられた。

第一回の研究会(平成七年(一九九五年)十月二十一日)の先生のご挨拶に、

「かつて中国古文字研究会(一九八七～八年)があったが、中途半端な形で終わった。また、他の時代には専門的研究会(例…秦漢史研究会、唐代史研究会など)があるが、殷周史に関しては中国にも見えない。そこで、若い殷周史研究者のセンターとして本会を発足させ、いずれは研究会組織としての発展を希望する。」

とあり、殷周史研究会の設立趣旨のごとき内容がみえる。私も設立時は四十代であり「若い殷周史研究者」の一人であった。

研究会の研究テーマは、「殷代世系の研究」で、王国維の関連論文

の講読から始まり、『史記』殷本紀などもとりあげた。ついで董作賓「甲骨文断代研究例」（二部分）、『殷虚書契後編』を読んだ。

第五十六回（二〇〇一年一月）には「王国維と辛亥革命」で先生にご講演していただいた。

第六十回（二〇〇一年十月）にも「穆天子傳について」で再び先生にご講演していただいた。実はこのころ、研究会が低迷し、方向性を失いかけており、「てこ入れ」をお願いした次第である。この低迷の責任は私にある。

このあと、『穆天子傳』の講読が始まり、研究会運営に順風が吹き始めた次第であった。

*

拙文を草しつつ（二〇二〇年四月）、ふと新型コロナウイルス猖獗が脳裏をよぎり、そのまま先生の『中国災害史年表』（国書刊行会、一九九三年）を繙く。紀元前一六三年（漢・文帝後元元年）に「詔して数年しきりにみのらず、また水旱疾疫の災ありとす。」とあり、ほぼ二十年後、紀元前一四二年（漢・景帝後元二年）には「大旱、衡山国、河東・雲中郡の民疾あり。」とあり、このあと、八十年近く後、紀元前六四年（漢・宣帝元康二年）には「今、天下すこぶる疾病の災を被る。」とある。

「はやり病」は、二千年以上前からの政治的重要課題であった。先生はつねに「現実の事件」を通史的に理解しようとされた。神戸の大震災のときもそうであり、余震の方の恐ろしさを語っておられた。このことも『中国災害史年表』にみえる。

とりとめもなくなくなったが、五十年間の思い出は次から次へと湧くものである。

*

先生は『王国維の生涯と学問』（風間書房、二〇〇三年）を上梓された後のことであるが、王国維研究が（研究的に）一番おもしろかったとおっしゃったことを思い出す。王国維が辛亥革命という、さまざまな価値観が変化した時代に「哲学青年」として生きたところに共感されたのであろう、と私は推察している。

冒頭述べたように、通常抱く哀悼とはいささか異なる感慨があり、いまは、ただただ黙して掌を合わせ、五十年間のさまざまな想いを心に巡らすのみである。

（千里金蘭大学教授）